

# 歌人 `渡辺よしたか、の生涯と作品（上）

野口 周一<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学

## 【キーワード】

台湾 花蓮港 『あぢさゐ』

## はじめに

渡辺よしたか（義孝）という歌人がいた。1898年（明治31）に熊本県天草に生まれ、戦前期は台湾新聞、台湾日日新報等の記者として台湾にあった。台湾日日新報社花蓮港支局の立ち上げとともに花蓮港に赴くや、1926年（昭和1）暮れに「あぢさゐ」歌会を立ち上げ、翌27年（昭和2）4月に『あぢさゐ』を創刊した。

その後、日本の敗戦により台湾から夫人の郷里・群馬県富岡市に引き揚げ、同地において『あぢさゐ』を復刊した。ときに1948年（昭和23）4月のことであった。そして、1983年（昭和58）1月に逝去するまで歌の道に精進し、『あぢさゐ』は同年2・3月号「渡辺よしたか追悼」をもって廃刊となった。そのとき、それは復刊後388号にまで達していた。

私は群馬県高崎市に生まれ育ち、富岡市には親しい縁戚もあり、頻繁に同地を訪ねていたが、渡辺よしたかの存在を知ることは全くなかった。いま、渡辺よしたかの戦前期の資料は台湾の大学図書館等にわずかながら残されているにすぎず、遺族もまた敗戦の混乱のなかでの引き揚げを体験

し、よしたかの著したすべての書籍を蔵しているわけではない。

しかし、それら残された資料を紐解いていくことにより、渡辺よしたかの数奇とも表現すべき台湾における人生遍歴、戦後の短歌指導における全国行脚、彼にとって短歌とは何であったのか、そしてその哲学的思索は宗教的情操にまで昇華されていたといっても過言ではないことがわかる。

本稿は、まずは資料整理を念頭におきながら、よしたかの生涯について台湾時代を中心に再現し、その著作物を収集する作業の報告としたい。

なお、本文中の引用文について、仮名遣いは引用原文のまま、漢字旧字体は原則として新字体に改めた。また、節により西暦と和暦が混在し、『あぢさゐ』と『あらたま』等の刊行年月日の表記が<sup>まちまち</sup> 区々であるが諒とせられたい。

## 1. `渡辺よしたか、との邂逅

私の研究テーマのひとつに「下村湖人の教育思想とその実践」という課題がある。下村湖人（1884〈明治17〉—1955〈昭和30〉）は『次郎物語』の作者として名高く、同書は1950年代から60年代にかけて多くの青少年の精神的成長の糧となってきた。私もまたそのひとりであった<sup>(1)</sup>。

---

## <連絡先>

野口 周一 noguchi@shohoku.ac.jp

その下村湖人は、1925年（大正14）に台湾に渡り、まず台中州立台中第一中学校校長となり、1929年（昭和4）に台北高校校長になったものの、1931年（昭和6）に辞任、日本に帰ることを余儀なくされたのであった。下村湖人の台湾時代は資料にも事欠き、その時代が彼にとってどのような意味を有するのか、考察されることはほとんどなかった<sup>(2)</sup>。

また、私の前任校・新島学園女子短期大学は、一時期その教育の質の高さで光彩を放ったことがあった。そこは国際文化学科を標榜し、国際交流に力を注いできた。私は台湾の姉妹校との交流を担当し、台湾と日本の関係のありようを学生とともに考えてきた<sup>(3)</sup>。

その過程で、孤蓬万里著『台湾万葉集物語』（岩波書店、岩波ブックレットNo.329、1994年）にも出会い、下村湖人は台湾時代に短歌結社「あらたま社」にも関わりがあったことを再確認していた。

昨年暮れ（2008年12月19日）、私は台湾日本語文学研討会に招聘され、その発表テーマを「下村湖人の台湾における教育文化活動—台湾あらたま社・樋詰正治との交友を中心にして—」とした。

その準備段階で、孤蓬万里の著作を再読すると、そこには、渡辺よしたかについての記述が存在していたのである。すなわち、「台湾短歌の揺籃」として、「あらたま」の後続に、

「あぢさい」昭和二年、渡辺よしたか。渡辺は台湾日日台東支局長で、同人の人数は少なかったが、西部と常に交流した（45-46頁）。とあり、「台北短歌会の誕生」の節には、戦後の消息として、

「あぢさい」の渡辺は引揚げ後も「あぢさい」をつづけていたが他界した（52頁）。

と、わずかに3行に過ぎない情報であり、しかも「西部と常に交流した」という記述には時間的推移を考慮していないという問題が残る。

また、陳黎・上田哲二譯『台湾四季一日據時期台湾短歌選一』（台北市・二魚文化事業有限公司、2008年7月）を入手した【図版1】。そこには「東台湾之歌（41首）」の章が立てられ、渡辺よしたかの歌が12首採られている。以下、採録しておく。

山々の十日の行きは尾根に咲くいろどりあや  
にうつつなからむ

今日ありしいのちは来り山の上に茅根をまき  
てひと夜ねむらん

句会には野のおもむきを添えむものさみだれの  
庭につまぐれを切る

白浪のまさやかに寄る沖つ渚の暗礁あらはに  
潮退きにけり

ほの暗む林の中に埴土のこみち絶えむとして  
はつづけり

木の葉蝶谷あひ暗き野いばらに翅をしづめけり  
手にとらふべく

山桃のげにも真紅のわくら葉が散りたるを踏  
む石の逕こみちに

向つ尾に雲吐くからに暗みたる影も光も夏ふ  
けにけり

木かげもる日ざしに翔ける翅のひらめく瑠璃  
の冴えも秋なり

煌めける奇萊主山の刻巖は退きうすれゆく雲  
に紛れじ

大理石の岩根削げたる崖鼻にみやまはこの  
花を摘みてな

あなあはれ夢うつつにも恋ひぬれば思ひとき  
めく岩桔梗の花

以上である。本書はそれぞれの歌の中国語訳が中心に掲載されている（163-166頁、187-194頁）。

一例として、第10首、「奇萊主山」の歌の中国語訳を示しておく（192頁）。

煌煌發亮的  
奇萊主上の  
巖褶，隨



漸薄漸去的雲

變得紛亂不清 【図版2】

巻末に収録されている、上田哲二による「後記一：為被遺忘の舌頭発声」、陳黎による「後記二：台湾四季・詩歌一事」は、各々の当該個所に「あぢさゐ」歌会、歌誌『あぢさゐ』および渡辺よしたか編集の『あけぼの』『八重雲』についての簡単な解説がある(202-203、213-214頁)。その一節に「拠《台湾関係人名簿》所載、他於戦後遷移到群馬県富岡市七日市」(203頁)とある。その七日市は加賀・前田侯の支藩が置かれ、幕末期には「天狗騒乱」にも関わりをもったのである。

私は七日市の縁戚を糸口に、渡辺よしたかとその遺族に、そして台湾大学図書館等に所蔵する『あぢさゐ』と、日本に現在はない歌集『豊秋』に巡り合うにいたるのである。

## 2. その生涯

### — 台湾への渡航から日本への引き揚げまで —

本章は渡辺よしたかが自著で書き述べていることどもを基本に、遺族の証言を付記することにより、台湾時代を中心に日本への引き揚げまでの時期に限定して構築していく。ただ、遺族の証言もまた客観的資料で考証する必要があることは言を俟たない。したがって、煩を厭わず注記を付していくことにする。また、年齢は数え年で表記する。

なお、本章において使用した主な資料は、以下の通りである。

「序」(『あけぼの』所収、あぢさゐ歌会、昭和11年6月)

「自爆の弁」(『台湾』第4巻第6号、昭和18年)

「巻末小記」(『八重雲』所収、大木書房、昭和19年1月)

「若き日のことども—在台四十年短歌生活の思ひ出ばなし—」(『文芸台湾』第2巻第1号、

昭和20年1月)

『最高の価値と最大の幸福—無限価値創造の歓喜—』(あぢさゐ社、昭和24年10月)

「放浪の歌人宗不旱—彼の台湾時代の思出ばなし—」(『日本談義』昭和28年9月号)

「著者紹介」(『北海道の歌』所収、北海道観光連盟、昭和41年3月)

『あぢさゐ』掲載の記事(「回顧十年」、「回顧三十年」、「回顧五十年」、「後記」、等々)

しかし、現段階では台湾時代の動向を考証しきれず、確定できない部分があるので未定稿であることは否めない。

### (1) 故郷天草、そして台湾へ

1898年(明治31)1歳

① 9月28日、熊本県天草郡大矢野町大字上576番地にて、父・藤太、母・エツの長男として生まれ、義孝と名付けられる(現在の戸籍謄本による)。

大矢野町は「熊本県の西部、有明海と不知火海に面する歴史とロマンの町として天草の玄関口に位置し、四面海に囲まれた温暖で風光明媚な土地柄」、「天草四郎の故郷」とPRされているところである<sup>(4)</sup>。

よしたかは、「郷関哀傷」というエッセーで、「ふるさとのは、潤びた老い母の乳房をまさぐる哀しみである。ふる里の土は、いたましき老父の肌をさするような思ひである」と筆を起こし、また

ふる里の土はしなびし老い母の乳房まさぐる  
思ひにも似む

祖父祖母のしわぶき給ふ声さへやいままた還  
るおくつきの丘

ふる里に抱かるる時何ものをも遂に持たざる  
われや幼児

と詠んでいる(『あぢさゐ』第33巻5月号、1958年(昭和33))。

『大矢野町史』(大矢野町役場、1970年)による

と、天草は市町村制(1889年〈明治22〉)により本渡、富岡、牛深の三町とその他60村からなり、よしたかの出生地・上村はその一村であった。その後、1954年(昭和29)の町村合併により、上村の区域は大矢野町大字上となった。

その風景を、よしたかは「私の記憶にある場所はすべて夢ではなく、実在してゐる。然し壮大であったと思ふ川はわづかに二尺ばかりの溝であり、長い長い坂道だったと思ふのは三四十米の道なのである。ここにこういふ窪地があり、平ら地があったと思ふとほりにすべて在る。然し皆ささやかな小さなものである。私の畑だったところの一隅に野茨の群があったと思ふのだが、それが六十年近くのちの今日も記憶の通り、そこに野茨があるのである。哀しきまで何にも変ってゐないふる里の丘であり、山である」と描写し(「郷関哀愁」)、

しましくはおとなふまじと思ひけるふる里の  
土をまたふみて立つ  
冬枯のひくき丘山たき木さへおぼつかなしや  
ふる里の島  
ふる里の土におふものみなかなし土の神聖と  
いふおもひしつ

と歌ったのである(「郷関落莫」、『あぢさゐ』第26巻3月号、1951年〈昭和26〉)。

②「私の父母は明治二十九年に渡台した草分け組である」(「巻末小記」)。

その間、子どもは親戚に預けられて生活していた(大岡みつ子〈よしたかの妻・渡辺次子の妹〉談)。よしたかは子ども仲間において餓鬼大将ぶりを遺憾無く発揮し生傷が絶えず、後頭部にそのときの痕跡として陥没があったという(中島しぐれ〈よしたかの三女〉談)。

当時、なぜ多くの人が海外に移住していったのだろうか<sup>(5)</sup>。よしたかは、村の印象を「私は、いつも私のふる里位あはれなまづしい村はないと思っ

てゐた」と述べる(「郷関哀傷」)。

前掲『大矢野町史』の新版にあたる『天草の門』には、「出稼ぎの意義」の節が立てられ、「天草は江戸時代中期から、島外出稼ぎの現象が現れていた」として、「長崎奉公稼ぎが奨励」され、「地域ごとに集団で長崎以外の各地に出稼ぎに出かけていった。これは人口過剰の対策として幕府の庇護の下、天領天草農民の特権であった」と記されている。そして、「明治に入ってもこの制度は天草の暮らしのなかに残り、ある年齢に達したら、出稼ぎ奉公に出ることが当然とする風習があった」として、「明治八年(一八七五)天草から球磨郡への集団移民を皮切りに、同十八年にはハワイへの移民が始まり、次第に海外に向かって動き出した」、「日清・日露戦争、第一次大戦の勝利は朝鮮や台湾、東アジアへの出稼ぎを可能にし」たのである(254-255頁)。

また、『『カラユキさん』の時代』の節が特に設けられ、そこに「明治三十四年十一月二十二日の九州日日新聞によると『天草の海外出稼ぎ人は明治二十九年末、すでに千六百四十二人を数え、その後増加傾向にあるが、天草銀行には毎月平均四千元の郷里送金が振り込まれている。同銀行を経由しない分を合算すれば優に一万円を超えるだろう』と報じている」とある(256頁)。これはすべて「カラユキさん」の送金ではないであろうが、出稼ぎの具体相を表している。

次に、よしたかの妻・次子の郷里、群馬県の具体例にも言及しておきたい。花蓮港の日本人による開拓村として当時知られていた吉野村村長を務めた清水半平の場合は、「氏は明治四十二年、その出身地八幡村木部(現在：高崎市木部町〈引用者注〉)が同年の風水害により殆ど不毛の地と化され為めに半村以上は何れへか移住を余儀なからしめられた事に発奮し、長兄は朝鮮へ、氏は台湾へと、各自同志を語ひて移住を断行したのである」

（『躍進群馬県誌』、躍進群馬県誌編纂所、1940年、14頁）とあり<sup>(6)</sup>、要は生活が立ち行かなくなったことを基因とする移住であった。

## 1906年（明治39）9歳

### ① 台湾・基隆に渡る。

「9歳で台湾に渡る」と聞いていたという（中島しぐれ談）。

1943年（昭和18）の段階で「在台三十七年に達する」（「巻末小記」）ので、計算は合う。

②「明治三十九年から大正三年まで基隆にゐて、十五六から作りはじめ、」（「巻末小記」）と、15、6歳から歌を作り始めたことに触れている。

## (2) 台南、台中、台北へ

### A. 台湾新聞勤務と青柳みどりとの同棲

## 1915年（大正4）18歳

### ① 台南に移る。

「大正四五年ころの台南時代」として、「当時台湾日日新報が台南で南部版を出してそれに短歌やその他詩などを募集してゐたが挿絵なども募り私はよく絵を出していた」とある（「若き日のことども」）。

また、「大正四年からの台南時代になっていくらか熱心になり」（「巻末小記」）と、歌作りに本格的に取り組み始めたようである。

②「大正四年、熊本中学校を卒業」（「著者紹介」）とあるが誤りである、これはよしたかが書いたものではない、と言う（中島しぐれ談）。したがって、当然のことながら、旧制熊本中学校の同窓会名簿である『江原会会員名簿』（熊本県立熊本高等学校江原会、2005年）に、よしたかの名前はない。

## 1918年（大正7）21歳

『台湾新聞』に勤務。

「○よごれたる禪を

竿に干さむとし

ふつと国家のことを思へり

○日の光りあまねき中に

くまどれる

暗き影あるを常にわが見る

以上の歌は大正七八年頃台中の台湾新聞の文選工をしてゐた木場秀信こと、草村信の歌であるが、私自身の短歌生活の跡を思ひ返す時ふとしては、念頭に思ひうかべる歌なのである。歌もこのやうに三行に書いてゐた。彼の郷里は私と同郷の熊本であるが、福日の歌壇で相当に幅を利かしてゐたらしいのである。その彼が台中にあり、当時私も台湾新聞にゐたのである（「若き日のことども」）。

ここでは、よしたかが台中にある台湾新聞に勤務していたことがわかる。また草村信の歌がよしたかにとって大きな意味があることも示している。なお草村は、後述することになるが、歌人・宗不旱をよしたかのもとに連れていった人物である。

他に「私の青年時代二十代のころ、台湾新聞に西口紫溟といふ男がゐて、『人形』といふ文芸雑誌を出した。私は当時台湾新聞に入社してゐて、その方に歌を出したりしてゐたが、いくばくもなく『南方芸術』と改題され三冊位出して廃刊になったやうに覚えてゐる」（「巻末小記」）とも記している。

戦後、よしたかは「大正七年から終戦まで（昭和二十年）まで、台湾日日新聞でジャーナリストとして活躍」（「著者紹介」）と記されているが、この「大正七年」の表記は煩雑さを避けたもの、すなわち台湾新聞や台湾日日新報等を一括したものと思われる。

## 1919年（大正8）22歳

青柳みどりとの出会いから同棲へ。

「二十二歳の時僕はT新聞の文芸部の整理を

やっていた。そこへ青柳みどりといふ女性から小説の寄稿があったのを添削し批評し返稿してやった。それが動機となり一度逢ひ度いといつて来て僕は逢ひに行ったが、それから交渉が濃くなって『若き救世主よ』などといつて来るようになった。ところが当人は僕よりも十一も年上である上に人妻であり半身不随のカリエスで十年もすでに病臥したままで床上に起き上がることがやつとであるといふ廢疾不具の女であった。ところがさうした状態にある彼女は病臥してゐて生きんとする熾烈な欲求から必死な真理思想宗教への探求心をもってをり、人間としての深いものを持っていた。その点で僕は畏怖し且つ尊敬を抱いたが、それ以上に先方では僕を思想上の指導者のごとく敬愛した。かくしてその不遇なる病者を救つてやらうといふ決意をして引取つて同棲した」(『最高の価値と最大の幸福』111頁)。

## 1920年(大正9)23歳

9月8日、与那国島において非嫡出子として真永誕生。

真永は二十歳のときに台北に父に会いに行き、出征に際して認知された、そのとき新婚の妻の前で戸惑うよしたかに次子は毅然として認知するように促した、という。したがって、渡辺真永を名乗る(松尾もみぢくよしたかの二女)及び中島しぐれ談)【図版3】。

## B. 芭蕉園の経営と宗不旱との出会い

### 1921年(大正10)24歳

#### ①台湾新聞を解雇。

「私が台湾新聞にゐたのは未だ二十三、四歳のころのことであまり生活が放埒なため辞めさせられた。自分としては当時の編集長安川次郎氏が下村長官の進退問題をすつば抜いた筆禍により退陣することになつたので、これに殉じたやうな気持ち

でゐたのだが、さうしたやうな陣容刷新を機になつたものらしいのである」(「若き日のことども」)。

この下村長官の進退問題とは、当時台湾総督府の総務長官下村宏を、初代文官総督田健次郎が1921年(大正10)に解任したことをさすものと思われる<sup>(7)</sup>。なお「すつば抜いた」のは、その前年の可能性もあるが、現時点ではその考証に到っていない。

#### ② 台中の郊外でバナナ園を管理・経営。

「私は新聞社を辞めて、台中の田舎の霧峯庄といふところの芭蕉園を経営することになり山の中にはいつてしまった」(「若き日のことども」)。

「その頃私は、台湾新聞の記者を辞めて台中市から東北へ三里ほど離れた万斗六といふ山地で、六千町歩ほどのバナナ園の管理を頼まれて隠遁してゐた。四囲山にかこまれた、日本人といへば私たち家族二人だけの侘住居であった。それは大正五年ころの春の日であった」(「放浪の歌人宗不旱」)。

まず「家族二人」とは誰とであろうか。言うまでもなく青柳みどりとである。また「大正五年ごろ」は明らかによしたかの記憶違いであり、他の資料との整合性にも欠ける。私は、1921年(大正10)のことと考え、この項においた。

また、バナナ園の管理・経営ということで多くの使用人もいた。彼らとの交流も描かれている。「その時、耕作してゐた人の中に洪秋水(アンチユウツイ)といふ中国人がゐた。私はその時まだ三十才そこそこ、その人はもう四十二三であった。私が用件で町に出ると、不便な昔の台湾の田舎のことでバナナ園から駅まで随分遠いのに、いくたびもいくたびも迎ひに出てくれた。この外多くの耕作者たちと、その地を別れる時、何日も前からその人たちは家につめかけては泣いていた。いよいよ別れの日、汽車に追ひすがって泣きわ



めき、危険なほどであった。文字も書けない自然のままの原始のようなその人々、日本人ではない、その人々、そういふ人々の愛がまだ私の中に生きてゐる。そのように、その人々の中にも私もまだ生きてゐるはずである。哀れかなしく美しき人々よ」と（『あぢさゐ』第34巻2月号、1959年〈昭和34〉）。よしたかの人間性と出会った人々との交流を考える際に、この一文は重要である。

なお、霧峯庄は現在の台中県大屯区霧峰郷、万斗六は霧峰郷の万豊村である。ここは台中盆地の東縁、埤頭山地の山麓にあたる。

### ③ 宗不旱との出会いと交友

宗不旱（1884〈明治17〉—1942〈昭和17〉）は熊本出身の歌人であり、数奇を極めた漂泊の生涯を送り、中国を放浪している間に作硯の技術を身につけ、それを売り歩くことにより、歌壇を批判するなど反俗の精神を貫きつつ、家族をも養ったのである。宗の代表作として、水前寺公園内には「ふる郷になほ身を寄する家ありて春迎を居れば鶯の鳴く」という歌が石に刻まれている。

よしたかは、宗との出会いをつぎのように描いている。

「(山の中には行ってしまった)私を慰めんとてか、台中から前記の木場君などちょいちょい訪れて、その中宗不旱といふ硯彫りの歌よみを紹介するから、と言って帰ったがさうした話があつて半月ほど経つたころ頭髪蓬々として垢じみた破衣をまとつて肩には振分けの包をかついだ、異様な男が私の山蘆のとぼそに立った。よしたかさんですか宗です、といふわけで荷包は一方は硯石材料の螺溪石であり、一方の包彫る材料の鑿などであった。かくして宗不旱氏は山中の客となり、数箇月を滞在し庭に筵を敷いては硯を彫りながら歌をよんでゐた。

硯彫るわれは硯師——月を踏みて  
月を踏みて……遊びに来ませ——

あそびに来ませ……月夜かささぎ  
と一日中誦んでは硯を彫った。

私はその彫られた硯を台中に台北に持って出ては金に替へてやってみた」(「若き日のことども」)。つぎは荒木精之とよしたかの問答である。

『『あなたは どうして宗不旱の名を知っていましたか』と聞くと『たしか植松寿樹の歌集の中に、不旱の歌が二、三ありました、それを見て不旱の名は知っていました。向うも知ってたんですね、それで私が遊んでくらししているもんだからたずねてきたんですね。その前に一、二回台湾新聞に歌を寄こしたんですよ、私が文芸欄をやっていましたからね。その歌を發表したことがあるのです。そんなことからやってきたんですね』(荒木精之『宗不旱の人間像—その反俗と漂泊と歌—』古川書房、1977年、79頁)。

「渡辺義孝は不旱が日本へ帰る旅費をつくってやった一人である。東京に出るというので一度ならず二度ならずつくってやった。それをその都度、どこかに行つては使つてしまい、またひょっこり戻ってくる、ということがあったという。三度目はほんとに日本に帰つていきましたが、と渡辺は話していた」(同上、79頁)。

以上より、宗はよしたかの許にやってきて、半年ほど逗留したことがわかる。その後東京の窪田空穂の家に転がり込むのである。それは関東大震災が起こる少し前のこと、すなわち1923年(大正13)8月であると考えられている。しかし、宗はよしたかの許を去って、すぐに窪田の許に行つたのかという点は不明である。荒木精之も前掲書においては、そのあたりの記述は曖昧である。ところが、よしたかは「宗不旱も私の後を追つて台北に出たがそれは大正十年ころであつたかと思ふ」と記している(「放浪の歌人宗不旱」)。そこに依拠しつつ、宗がよしたかの許にやって来た日時を考えると、私は1921年(大正10)のこととしておきた



い。ただ、宗が中国から台湾に渡って来たのは、よしたかの許を訪ねる時期をある程度遡るであろうことは想像に難くない<sup>(8)</sup>。

④台北において雑誌『婦人と家庭』を経営・編集。

「かうした山中へ隠遁生活をしてゐる私に台北で『婦人と家庭』といふ雑誌を故古川精馬氏から譲受けてやってゐる田淵武吉(当時秋汀と号す)君からは是非私にやって貰ひ度いと再三の使者を向け出慮を促がされ、私もその気になって台北に出て、『婦人と家庭』を経営することになった。これは大正十年ごろのこと」(『若き日のことども』)。

「僕たちはある婦人雑誌を経営して彼女がかつて中央文壇で筆を取ったことがある文才を生かし婦人覚醒のため、その雑誌を生命として必死の力をつくした」(『最高の価値と最大の幸福』111-112頁)。この「中央文壇」のくだりは、平塚雷鳥の青鞥社であった(後述)。

C. 岩満千恵との逃避行

1922年(大正11) 25歳

① 岩満千恵との恋愛、そして逃避行。

「僕は(みどりととの〈引用者注〉)同棲四年、雑誌の援助者である某子爵の息女であり高官夫人であった千恵といふ女性と恋愛をした。これは明らかにげいしい熱烈な恋愛であったが、ついに逃走を企てて僕のある友人への告白から、追手がかかって彼女は監禁されツイニカンキンサルカナシチエの一本の電報と共に永遠の別離となり、それから約十年彼女は夫の許に帰り、大連で病死したといふことを改造社版新万葉集の作者経歴によつてはじめて僕は知ったのであった。出奔当時某新聞は全頁をつぶして『某高官夫人と若き詩人の恋の絵巻』などと書き立てられた」(『最高の価値と最大の幸福』112頁)。

なお千恵の姓「岩満」は、戦後の『あぢさゐ』第23巻6月号、すなわち復刊第2号(昭和23年6月5

日発行)の「後記」に出ている。

また、よしたかが千恵のその後の消息を知りえた「改造社版新万葉集」(『新万葉集』第1巻、改造社、1938年〈昭和13)を紐解くと、千恵の歌とその経歴が出てくる。

まず歌4首をあげる(324-325頁)。

悩みぬき苦しきとほしおのづからある安けさに今は居りつつ

夫大連に赴任 一首

蔓草のよりどころなき独りして家を守るに疲れむとすも

君と在りてひまなく事に追はれつつおみなご吾の心足らふも

心をば傾けつくし君を思ふこの性<sup>さが</sup>ゆゑに苦しみて来し

経歴は「岩<sup>いはみつち</sup>満<sup>る</sup>千恵」として、「明治二十九年三月十五日鹿児島県川内町平佐北郷氏に生る。鹿児島第一高等女学校卒業。大正六年四月同郷出身の岩満重に嫁し夫の任地台湾に行く。大正十二年頃より和歌に興味を有し独学にて斯道に精進、昭和五年より『創作』に岩水八重の名にて毎月投稿、昭和十一年十一月二十三日大連にて死去。四十一歳」とある(495頁)。

私はここに千恵の歌と経歴を見て、よしたかの千恵に対する純粋な思ひの丈の激しさとその心情はいかばかりであったかと思う。

最後に付記しておきたいことがある。よしたかと千恵の逃避行の終着地は北海道であった、何故ならば北海道には北郷氏所縁の人々がいたから、と言う(中島しぐれ談)。

② 青柳みどりの許に帰る。

「私は逃避行半年にして放擲して去つたみどりの許へその後の生活を守るべく罪のつくなひの心で帰り、せめてその心の傷手をいやす責務を果すべく又同棲した」(『最高の価値と最大の幸福』112頁)。

### (3) 花蓮港、台東、再び台北へ

#### A. 花蓮港と『あぢさゐ』の創刊

1926年(大正15・昭和1) 29歳

① 9月19日、台湾日日新報社社員として花蓮港支局の立ち上げとともに、同支局に勤務。

「大正十五年九月、私は台北にゐて『婦人と家庭』といふ月刊雑誌を出してゐたのをやめて花蓮港に再出発の地を求めた」、「花蓮港は、台湾でも未開地であったが、中川鬼一が花蓮港の新聞社にゐたことがあり、(その当時は台北に来てゐた)彼の師事した俳人斎藤東柯といふ人が東台湾新聞の社長であったりしたので、私は鬼一のすすめにより花蓮港行きを志した」(『回顧三十年』、『あぢさゐ』第30巻9月号)。

② 俳句雑誌『うしほ』の復刊。

「そこに俳句雑誌『うしほ』といふのがあり、俳句の方では日本的に錚々たる巨人が揃つてゐた。当時台北では、山本孕江が主宰する『ゆうかり』といふのが(ホトギス系)あつたけれど、花蓮港の『うしほ』の作品には遠く及ばぬものがあつた。特に鬼一に紹介された斎藤東柯の句の如きは全国的にも卓抜したものであつた。私が花蓮港に行ったので、それをきっかけに早速久しく休刊していた『うしほ』を復活編集一切を任されたが、私はそれと同時に短歌の会も直ちに始めた」(『回顧三十年』)。

③ 12月、「あぢさゐ歌会」を設立。

1927年(昭和2) 30歳

4月12日、『あぢさゐ』創刊号を刊行。

「三十頁、歌稿は二段二十行単位、作品には標題を付し、三十余名発表」とある(『回顧十年』、『あぢさゐ』第10巻6月号)。

1928年(昭和3) 31歳

11月30日、歌集『豊秋』を「あぢさゐ叢書」第1編

として刊行、発行所は「紫陽花社」としている。

1930年(昭和5) 33歳

チブスにて入院。

『花蓮港俳句集』(後述)に、渡辺秋人の俳号で「チブスにて入院中花涯師御正忌を修さるる鐘を聞く」として、「鐘が鳴る南無藤浪の花の空」とある(117頁)。

私は渡辺秋人を渡辺よしたかと考えている。後掲、1939年の第④項を参照のこと。

1933年(昭和8) 36歳

① 6月15日、浜口正雄(『あらたま』<sup>(9)</sup> 主宰) 花蓮港来訪。

「今度の花蓮港で最も愉快に耐へなかつたことは古い友人の渡辺よしたか氏、松下久一氏に遭へたことであつた。渡辺氏には十二三年振であらう。あの頃兎角放縦な生活をしてゐたが、今ではすっかり落付いて、岡麓に傾倒し、自分の居を構へて、夫妻楽しく暮らしてゐる姿は羨ましいものに見えた。其処で苦手の短冊を書かされたり、朗詠をやりあつたりした。短冊を書かされるのは生来悪筆の私にとっては随分困るのである。麦酒がまはつてついうかうかと書きなぐつて了つた」(浜口正雄「編集余録」、『あらたま』第14巻第8号)とあり、宴席の状況が目に見えるようである。なお、岡麓<sup>ふもと</sup>(1877<明治10>—1951<昭和26>)はアララギ派歌人であり、「子規直門の長老」として重きをなし、蹉跎つづきの人生の苦悶を歌つたことで知られる。

また、浜口の「渡辺氏に遭へるは十数年振なり」の詞書のもと、巻頭に「八月集(その一)」として詠まれている(『あらたま』同上)。

面向ひ物に言はねどいまの産<sup>さん</sup>をなせる友の上<sup>うへ</sup>を  
をしみじみ思ひつ

家のまはりに木草を植ゑて花を咲かせこの幾

とせか君はおちつく  
縁の向うに高山を置きて朝ゆふの眺めほしい  
ままなる起居<sup>たちろ</sup>おもはむ  
閑かなる世<sup>よ</sup>過ぎにむかふおもむきの茶道にし  
たしみてあるか或日は  
病み妻を常いたはりていと長き年月悔いぬ君  
に打たれき

浜口がよしたかの身邊を的確に描いていることが、手にとるようにわかる5首である。

②6月、奇萊主山縦走を行う。

「昭和八年六月奇萊主山縦走行追懐」として9首掲載されている（『あぢさゐ』第9巻10月号）。最初の3首をあげる。

山々の十日の行きは尾根に咲くいろどりあや  
にうつなからむ  
尾根の上のうすゆきさうを石楠花を恋ひ思ふ  
よりただに行きてな  
谷くほの水無瀬の岩根しみつきてごるいく  
夜もこほしかりけり

この縦走は、楨有恒（1984〈明治27〉—1989〈平成5〉）とともに行われ、その行程の具体相は、後年よしたかが歌っている（『あぢさゐ』第26巻6月号）。

「復唱合歓奇萊山縦走」として「野営第一夜」、「野営第二夜」、「奇萊北峰征頂」、「野営第三夜」、「雲上樂園」に分けられている。順次2首ずつあげる。

屈強のタイヤル二十人引具しつ編隊いよいよ  
未踏地に入る  
いとどしき雨もあがれば朝焼のこのさやけさ  
のゆゑに山恋ふ  
熊笹に一間先もわきがたく勘もて泳ぎ先行者  
追ふ  
人間の方向探知の六感かたがはず熊笹をわけて  
現る  
たのもしや楨氏トップのロップ肩にわれは二  
番のリング巻き縮む

いく日の歩みのあとの谷ひだは重疊濃淡のか  
げなしにけり  
こは熊の足形<sup>がた</sup>ぞ然もけさ踏みしあとぞとタイ  
ヤルのまなこかがやく  
削ぎ落つる直下五千尺の断崖のひだにぞ水の  
湧きてながらふ  
稜上の雪割草にてんぐてふとまりまづめり烈  
風のなか  
鮮かにさみどり芽ぐむ五葉松<sup>ゆ</sup>にぞ適く思ひし  
て射精もよほす

ここで標高を示すと、奇萊主山北峰3607m、奇萊主山3560m、奇萊裡山3384mとなり、その峻険なさまが歌からも読みとることができる。司馬遼太郎は「台湾の東半分は、大山魂である。その形容は漢字表現こそふさわしく、清朝のころの記録には、岩溪窮谷、高峰<sup>ばんがく</sup>万壑、人跡不到などという印象的な表現がある」と記す（『台湾紀行』〈街道をゆく40〉、朝日新聞社〈朝日文庫〉、1997年、274頁）。

また、タイヤル族は日本人が「高砂族」と総称した先住民族のひとつであり、日本の支配に対して激しい抵抗を示し、その頂点となった霧社事件（1930年〈昭和5〉）では日本軍は絶滅作戦に近い報復を行ったのであった。

楨は1956年（昭和31）第3次マナスル遠征隊長を務め、初登頂を成し遂げた。その成功を告げた手紙が写真とともに送られてきた、という（中島しぐれ談）。

よしたかは、初登頂成功後の楨を訪ねている。その状況は「時雨山房雑記」の一節に語られているが、二人の交友はなかなか美しく、清々しい印象をうける。楨は花蓮港を思い出して、「花蓮港の山は美しいですね、そしてあのクロトンの鮮紅の色と共に忘れられない自然です」と語っている（『あぢさゐ』第32巻8月号）。

よしたかには、「クロトンの生垣の上にある雲

の杳かに淡し冴えかえりつつ」という蘇やかな歌もある（『あぢさゐ』第11巻12月号）。

### 1936年（昭和11）39歳

① 1月26日、うしほ・暁翠会・あぢさゐ合同吟詠会を開催する。

よしたかの意図するところは、「これは俳句のうしほ、漢詩の暁翠会とあぢさゐと合同一種の親睦を意味する会合で東台湾文化の上に何かの意義をなすものと信づる」というところにあった（『あぢさゐ』第10巻2月号、「編集室」）。

② 6月15日、創刊10周年記念を期し、あぢさゐ歌会同人著、歌集『あけぼの』を「あぢさゐ叢書」第2編として、あぢさゐ歌会から刊行。

同書について、『あらたま』第15巻第9号所収「新刊覚書」には、「台湾東部に熱心に勉強してゐる渡辺よしたか氏の率ゆる『あぢさゐ』の十年記念刊行である。全然歌壇外に閉塞して十年、これまでに仕上げた努力は尊敬さるべきだと思ふ。作品も甚だ地味で好感を受けるのである」と紹介されている。

この『あらたま』を主宰する浜口正雄は、上記の「歌壇外に閉塞」という個所について、「渡辺さんが『あぢさゐ』を外部に出不さないといふ意図がよく分るやうな気がする。自分と手を繋ぐ者を、現今の歌壇の悪風潮に染まらしたくないといふ、一凶<sup>ママ</sup>さからこ<sup>ママ</sup>ういふ拳に出てゐるものと思はれる」と好意的に述べている（『あぢさゐ』第10巻6月号）。

また、尾崎秀真からは、「拜読愈々御清祥賀上候過日は拙作御覧に入れ候処御清覧を忝ふし御懇書却て恐縮に存候又御休心にかけてさせられ貴著『あけぼの』御恵投され面白く拜見御芳志忝く謝上候又あぢさゐ御送り下されはまた面白く殊に表紙の画など芸術の神様ならでは出来ぬ芸当と感服致候」という来信があった。この尾崎秀真は著名な

考古学者・民俗学者であり、『文芸台湾』の同人でもあった。ゾルゲ事件の尾崎<sup>ほつみ</sup>秀実は、秀真の実子なのである<sup>(10)</sup>。よしたかの娘たちは、父が拘留中の秀実に面会に行ったことを母から聞いている。何らかの交流があったのだろう。

③ 6月20日、『あぢさゐ』第10巻6月号を刊行。

巻頭に「あぢさゐ創刊十週年を迎ふ」と題して、主宰よしたかの歌7首が掲げられている。最初の3首をあげる。

いづくんぞ十とせもふりし年月と言ふべからむしるしなくして

すぎぬればすみやかなれや月並みの悔いにも遠しねがふところに

のこしけるあとのまづしさまづしさのゆへのあはれなほまさるべし

みどりには「あぢさゐ歌誌十周年祝賀宴」と題した句がある。

庭園の茂みに女給宴を待てり（『花蓮港俳句集』）

よしたかの筆になる「回顧十年」もあり、歌会を創始する契機、運営等、いわゆる「あぢさゐ歌会事始め」が明らかになる。以下、抜粋していく。

まず、歌会及び歌誌創設の状況については、「創刊当初、歌会創立当時、大正十五年末は花蓮港街の人口僅かに七千、内地人数その大よ半数と見てよかろう。かかる少数の一地方に於て、未だ歌作に志す者皆無なりし状態の中に、小生来住の機縁あって、大正十五年九月十九日来花、同年大正天皇崩御ましまし改暦昭和元年十二月に入ってからであったか当時の花蓮港小学校長、長岡秀夫氏宅と、専売支局長出澤鬼久太氏方に於て、相前後して歌会を催したのであった」とある。

つぎに、どのような人たちが歌を詠み始めたのだろうか。「歌会に集まった人々と言っても強制的に寄せ集めたものであって、当時あっては全く未知数の思想的広野であり、暗中模索的な出発



をしたのであった。交通的な上から見ても、今日に比すと甚だしく不便で中央に比して文化的に甚しく取り残された観があり、台湾を標準としてさへも、就中隔絶された文化の位置にあったのである。(中略)然しこの半面に於て気風純朴の良風があつて会に参集した人員も、予想に反し容易に多数を収容し得て、昭和三年御大典記念事業として出版せる、あぢさゐ叢書第一篇『豊秋』には満一年有余にして人員百二十名に達したのである。

また、どのような方法で、彼らを歌にいそませたのか。「何等刺戟なき環境にあつたため歌会創設当時にあつては、燎原の火の如く流行的に雷同的に短歌熱が瀰漫し風靡して、昭和二年黒金通一〇番戸の発行所に於ける歌会に於ては市内民間の人々の寄り合ひと花蓮港市内の同志を一団とする、約二十七八名から三十名を水曜日として例会を継続、これと相次いで月曜日には第三大隊長松久秋嶺氏方に於て、みなづき会と称し約十名を擁し、火曜日として加来義男氏宅で、花蓮港公学校職員を一団とする約十名、朝日組の一団が石田順平氏方或は三宅邦彦氏宅で交互に日曜日に開催、木曜日は言ふまでもなく、鉄道出張俱樂部で約二十四五名の一団、金曜日として出澤氏方で二十余名と言ふ風に、まったく花蓮港といふ一地方を席捲したかの観があつた」とあるように、さらには大和、壽といった地方支部をも設けたのである。これは所属団体とよしたかの「巡回講評講義」の都合上、また人数制限のために上記のような形態になつたのである。ここには、戦後のよしたかの作歌指導における全国行脚の萌芽が見取れる。

後年、よしたかは花蓮港時代の歌会の様子を回顧して、「歌会は仲々厳格で、時間厳守であつた。あぢさゐの四天王の一人と言われた、門馬つねすけが仲々のやかましやで、女たちが歌会がうれしくてはしゃいで笑ふのを、『笑っちゃいかん、そん

な不謹慎な奴は出てゆけ、話してもいかん』と言つて叱りつけたものであつた」、「あぢさゐでは昔から決して、誌代以外、飲食を共にするための出費をしなかつた」と述べている(「回顧三十年」)。

そして、『あぢさゐ』の原稿はどのように集めたのか。それについては、「原稿は一々例会の詠草を書き抜いて克念に整理しておく、地方からの歌稿は折返し即時評をして返送し、改めて締切期日までに送稿せしむるの煩を思つてこれも書き抜いておくと言ふ始末で仕事の大部分をこれに没頭してゐる始末であつた」とあり、その他「雑誌印刷の浄書、校正引つづいて発送、会費の徴収全く一人役者である。毎月の表紙は十年一日如く全部肉筆で描く」という労苦を記録している。しかし、この表紙絵は大きな魅力ではなかつたか、と思う【図版4】。

最後に、『あぢさゐ』という誌名に触れておきたい。これについては、みどりが「発行所内輪ばなし」において、「あぢさゐは一つの花がさまざま色彩を持つてゐる。雑誌も歌だけの発表ではどうせつづくまいから……歌を主として他の文芸作品も加へ様と思つてゐるから丁度多種多様な象徴として『あぢさゐ』が好いぢやないかとまあこんなわけで名付けられたのであつた」と述べている(『あぢさゐ』第10巻6月号)。

みどりは上記の歌会と指導について、「昭和二年当初の渡辺の会員勧誘は凄まじいものであつた。明けても暮れても歌の道を説き、写生の手法を唱へ……歌のうの字も思つてゐない人中を説き廻つた。そして忽ち月曜会、木曜会、金曜会と殆ど一週間打通しに歌会が続く様になつた<sup>(11)</sup>」と述べ、「発行所は道場であつた、会員は同行であつた」として「歌はれた草木をよく知らない時は見当たる迄近郊を探し歩いて……又他の同行に持つてかえつては示し合ふ人達、あの景色は？かの山！と自分の感銘をまるで宝でも抱いてゐる様に随喜



しつつ語り合ひほこり合ふ人達それはまったくいと高きものを願求しつつ生きて行く宗教的な行と等しかった、(中略)一つの道の法悦に浸り其喜びを分ち合ふ汎愛の仏行にも似た交りがあった」と記している。後者には、よしたか後年の著作である『無窮光』の哲学的思索の素地を見ることが出来る。

なお、「回顧五十年」(『あぢさゐ』第51巻1月号、1976年〈昭和51〉)には、上記に述べられていないことどもが書かれているので、採録しておきたい。

「その上に月に一回、全体の会を召集して大会というものをも行った。その詠草を読むだけで二時間もかかった。今思えばようやったものと思う。その時分の会費が三十銭、五十銭の援助会員もあった。五十年昔の話である。印刷代は驚く勿れ、二十円であった」

「かくて、花蓮港では大げさに言えば日本人である限り皆歌を作った。(中略)日本の人ではない本島の人まで歌を作った」

「あぢさゐ創刊十年頃のこと。私はその頃のあぢさゐを一冊亡き斎藤茂吉氏に送ったところ、中央歌壇と何ら関わりのない台湾に於てこんな雑誌が続行されているというのは驚異である。という意味の手紙をもらった。その手紙をもらったことは嬉しいが、中央歌壇と関わりなしにという考え方には大いに引かなかった。しかし、茂吉氏は必ず自筆の年賀状をくれた。やはり仲々偉い人であったと思う」

そして、時代は遡るが「自爆の弁」には、印刷所についての言及がある。すなわち、「当時花蓮港では雑誌の月刊ものなど刷った経験のある印刷所もない関係から一、二号は台北で刷ったのである。然し花蓮港にも貧弱ながら日刊新聞もあり、印刷所も二、三あったので、東台湾の印刷文化向上の刺戟にもなるからといふ考へから三号以後は花蓮港で刷るやうにしたのである」と。

④9月27日、うしほ・暁翠会・あぢさゐ合同吟詠会を開催。

### 1937年(昭和12)40歳

6月28日～7月6日、羽鳥医院に入院。

「十六日東久邇宮殿下御成り当日から熱帯熱の発熱、無理押しをつづけ腸の弱りに加へてこぢれたため」(「后記」、『あぢさゐ』第11巻9月号)。

この羽鳥医院の院長は羽鳥重郎であり、『躍進群馬県誌』には、彼の略歴とその活躍ぶりが記されている。すなわち、巻末の「現代活躍人物編」、第6章「台湾編」に「従四位勳四等 医学博士 病院長」として掲載されている。以下、要旨を抜粋しておく。

略歴は「明治四年一月十六日富士見村ノ旧家羽鳥文次郎氏四男トシテ出生、高等小学校卒業後殆んど独学ヲ以テ進ミ、明治三十五年台湾総督府衛生試験場技師トシテ赴任、悪疫跳梁ノ間ニ処シテ之ト闘ヒ保健衛生ノ重責ヲ果サレ台湾風土病ノ権威者トシテ大正十五年台北州衛生課長ヲ最後トシテ退官、昭和六年花蓮港街ニ於テ開業今日ニ至ル、其間台湾恙蟲ノ発見研究ニ関スル論文ニヨリ輝ク医学博士ノ学位ヲ授与セラレタリ」(13頁)となる。

また、当時の花蓮港について、前掲『躍進群馬県誌』所収の「清水半平」の項(「羽鳥重郎」に続いて収録)には、「当時の花蓮港は蕃害、悪疫の跳梁甚しく、稍々すれば挫折せんとする開拓の気分を自から引立、同志を指導して鼓舞鞭撻し、或時は、塩、味噌醤油等の欠乏にすら遭ひながらも良くこれを克服し」(前掲書、14-15頁)とある。

その花蓮港に、羽鳥は足を踏み入れたのである。同書の紹介文には、「大正十五年輝く功績の裡に官界を退かれた後も尤も不健康地であり、恙蟲の被害多き花蓮港に病院を開き、該地方面住民の健康を護ると共に不断の研究を怠らず精進し来られ

たことは、氏の老を知らざる信念の強さを象徴するものであろう」(14頁)と賞賛されているが、これはまさに真実であった。

よしたかは、「羽鳥博士居室を病室に充て賜る」  
として、14首を捧げている。そのうち、6首を採録する(『あぢさゐ』第11巻7・8月号)。

み手づから机蓑盆など運びまし居心地よくと思召してや

すがすがとうつしみ瘦せておはせども高き寝いびきたてたまふかも

東台寺の夕べの鐘はまちかなる二階に臥りとくとくにきく

夜の更けに口ずさみゐます声きけば古今集の歌か何かのごとし

独逸語の術語か何かいねぎはにつぶやきたまふ老いを思ほゆ

午前二時また往診の先生に慰め言ひてなみだぐましも

なお、羽鳥重郎には『眠鰐自叙回想録—台湾医事衛生小誌—』(眠鰐自叙回想録刊行会、1964年)がある。この刊行会は「羽鳥又男方」に設けられたのであるが、この羽鳥又男はアジア・太平洋戦争末期に台南市長を務め、戦後は国際基督教大学の事務局長として開学期に活躍し、近年その胸像が故郷の勢多郡富士見村に建立された(『上毛新聞』2007年1月22日付)。

## B. 台東へ、みどりの死、そして結婚

1938年(昭和13) 41歳

10月、台湾日日新報台東支局へ転勤。

『あぢさゐ』の編集は、花蓮港在住の藤井重雄、阿部烏秋等に任された。

1939年(昭和14) 42歳

① 1月、腸チブスで台東病院に入院(「巻末小記」)。

「昭和十四年私は台東で再度の腸チブスで入院

した。その時みどりも早これが終りであらうと思はれる危篤状態に墜入った。私も発熱してみたが、も早最後と思ふので看病をつづける内に、私も高熱で無意識になって病院にかつぎ込まれたが、私はみどりの死を半月も知らず劇的な別れであった」(「回顧三十年」)。

② 2月12日、みどり死去。

『あぢさゐ』第13巻2・3月号は「二月十二日午前五時渡辺みどり先生永眠さる 謹みて御哀悼申上ぐ」とその訃を告げる。

同誌に、よしたかの「みどり告別式」と題する歌が、「病中未定稿」として6首掲載されている。そのうち、4首をあげる。

何もかも覚えねどあはれもろもろの人まことにつつまれにけり

義妹が野に摘みにけるすすしろの花や二月の野べをゆかまし

魂抜けのうつしみにきこゑくるものは白める窓の雀子のこゑ

あなあはれきさらぎの空せばまれる窓に恋ほしも思ひ思へば

その位牌はかつて渡辺家の仏壇にあった、という(松尾もみぢ談)。

③ 3月30日、渡辺美鳥編『花蓮港俳句集』(台湾大学図書館蔵)が古賀山青により刊行される。

みどりは編者として「後記」を記す。山青は「序」において、「みどり女史が長年月に亘る不自由な固疾と闘ひながら俳句の蒐集、整理、清書その他一切の事務を執られたことは同人ひとしく感激するところである。みどり女史が居られなかったならばこの書は恐らく出来なかったであろう」と述べている。

その同人に「渡辺秋人」がおり、私はこの句集を読みながら、秋人はよしたかであろうと直感した。しかし遺族は「よしたかが俳句を作ったとは聞いたことがない」という。銘傳大学の頼衍宏に

問うたところ、言下に「秋人はよしたかです。『うしほ』に句が載っています」と言われた。私はまだ『うしほ』を見ていない。

因みに、よしたかの画号は「竹秋」であり、俳号とともに「秋」に関わっている【図版5】。

渡辺秋人の『花蓮港俳句集』における句を採録する。

手だゆさの春雨傘を代り持つ（昭和4年作）

ゆく春の灘をぞ移る大魚かな（昭和4年作）

翅を搏たず峡間に墜つる蝶一つ（昭和3年作）

石楠花の雲のしづくの落ちそむる  
（昭和4年作）

鐘が鳴る南無藤浪の花の空（昭和5年作）

夏安居湯槽の水を溢れしむ（昭和5年作）

わかたるる魚鱗に今は月のかげ（昭和3年作）  
あしびきの山の香幽ふかき月を踏む  
（昭和11年作）

秋ふかく秋の水ゆく光あり（昭和3年作）

朝露の笹の小みちにおもむきぬ  
（昭和4年作）

兵隊の古帽かづき踊るもの（昭和4年作）  
栗まつるデワスにおみな触れしめず  
（昭和3年作）

菊に佇つ何のかごとをかへさむや  
（昭和10年作）

ぐみの葉の白さや波の音そこに  
（昭和元年作）

小春風いくりはらはに潮退きぬ  
（昭和10年作）

うす月の枯野にそよぐものもなし  
（昭和11年作）

雪光る遠嶺の鬘に柁黝し（昭和11年作）

私は、1930年と39年の項目から腸チブスにて2回入院したことが判明することにより、「よしたか即ち竹秋」説の傍証になると考える。

④ 5月10日、『あぢさゐ』第13巻4月号、「渡辺美

鳥女史追悼号」として刊行。

よしたかは、「俳人みどりの生涯」を5頁にわたって記す。山青の言う「固疾」について、よしたかは「世にも稀なる重患を負ひつつ三十年間の闘病生活は彼女にとって全く女性としての光明を失はしめたであろう」と述べる。

みどりの病状について、みどり自ら詠んだ句がある（『花蓮港俳句集』）。

うつそみの十年を病みて柚湯かな（昭和2年作）

恵方神輿につかまり拝みけり（昭和3年作、この句には「半身不随にて車上と雖正座する能はず」と「註」がついている）

これやこのわが即身に夜具かかる（昭和3年作、詞書に「歩行叶ひし夢より醒めて」とある）

針持ちて師走心のふしどかな（昭和3年作、詞書に「病臥十年二句」とある）

春を待つ身のしかすがに髪洗ふ（昭和3年作、同上）

枕邊の豊にあそぶ柳絮かな（昭和7年作、詞書に「長病一句」とある）

不治の身をいたはり生きて日向ぼこ（昭和12年作）

よしたかの娘たちは、みどりについて「病はカリエスであり、もともとは役人の妻であった。車椅子もない時代に、父はどこへでも抱いて連れて行ったと聞いている」と感嘆している。具体的には、よしたかは「浅草育ちの女で芝居が好きで、平塚雷鳥などと青鞥社の運動をしたような女であった。芝居が好きなので、よく私は若い身空でありながらおしめをかって、おんぶして劇場に芝居のある夜は毎晩のように連れて行った。歩けないのでよく野原にもおぶって出かけた」と記している。それに続けて「然し私は苦悩した。精神と肉体の相剋に悩んだ。かくして苦悩二十年、それは私に何ものか大いなるものを残したのであった」とあり（「回顧三十年」）、この点がよしたかの

人間性を考える際のポイントになるであろう。

⑤ 9月16日、神保次子と結婚。

次子は1915年(大正4)5月2日に、群馬県北甘楽郡小野村にて、父・豊次郎、母・かくの二女として生まれた。神保家は豊次郎の父が肋膜炎を患い、その治療費を捻出するために田畑を失う。次子は両親とともに台湾に渡り、やがて台北市立台北第一高等女学校(昭和7年3月12日卒業)、台湾総督府台北第一師範学校を卒業<sup>(12)</sup>(昭和8年3月22日)、その後教諭をしていた。

次子はよしたかとの出会いを、後年「かすかな足あと」で、次のように述べている。「その頃肺門淋巴腺炎で台東医院伝染病棟に入院してゐた叔母をはじめて見舞った時丁度チブスで入院してゐた渡辺を叔母の病室で見かけ、やはりそこに入院してゐた小学校の同僚の紹介で改めて渡辺の病室に行き、人生観宇宙観等哲学的な話<sup>(13)</sup>を二時間余り拝聴し異常なショックを受けすっかり傾倒するところとなった次第です。歌稿の締切日が来てるから歌を見てもらったのが歌への歩みの第一歩です」(『あぢさゐ』第28巻2月号、昭和28年2月15日)。

⑥ 12月20日、『台湾』成立披露宴が「台湾歌人倶楽部」の後援のもとに開催され、発起人に名を連ねる(『台湾万葉集』物語)48-49頁)。

孤蓬万里、すなわち呉建堂は、これは台湾詩歌文学愛好者大同団結の路線と考えるが、これを真っ向から否定する見解がある。井東は「この点は後に方針が変更されている。現実にはその後台湾の歌誌が団結した事実はない」としている(井東襄『大戦中に於ける台湾の短歌一斎藤勇を中心として』近代文芸社、1998年、7頁)。私も首肯する。

1940年(昭和15)43歳

① 5月16日、長女あやめ誕生。

『あぢさゐ』第15巻1月号(昭和16年1月18日発

行)に「身辺」という歌8首がある。そこから3首をあげる。

煩惱におぼれはせじといふものつぶらまな  
こを凝れるみどり児  
箸をもてふゝましむれば巧みにも舌鼓うつさ  
も甘らにぞ  
尚欲しと見上ぐる瞳あげてをるひたぶるの顔  
にわが見惚けつつ

② 9月、渡辺よしたか編『みどり句集』刊行。

郭千尺は、「四六版、一六五頁、昭和十五年九月於台東。著者『うしほ』系統俳人、係編者夫人。此集乃収其自昭和二年至同十四年間之遺作」と記す(『台湾日人文学概観』<sup>(14)</sup>)。

1941年(昭和16)44歳

① 2月、門人藤井重雄を東京に送る。

藤井が1952年(昭和27)に病死したとき、よしたかは特集号を組み、年譜を作成する。

「二五歳(昭和十六年)三月願いによって辞職した。この間許婚者のある女と恋愛問題を生じ苦悩した結果、再度勉学を志して上京し東洋大学専門部倫理国漢科一年に入学」(『あぢさゐ』第27巻5月号)。

【図版6】はその送別の宴であり、よしたかは藤井を自宅に招き、家族とともに記念撮影をした。骨董を趣味としたよしたかの生活の一端が窺い知れる。

② 5月18日、『台湾』主催・全島歌人大会(於台北教育会館)にて講演と朗詠を行う(『あぢさゐ』第15巻7月号、「後記」)。

C. 台北へ、『あぢさゐ』廃刊へ

1942年(昭和17)45歳

① 3月3日、長男紘一誕生。

このとき、よしたかの父・藤太はお祝いに自ら絵筆をとって小田原合戦を描いた武者幟を贈っ



た。その腕前はよしたかより秀れていた、引き揚げに際しては衣類として持ち帰ったという（中島しぐれ談）。

②物資欠乏のため、とくに紙不足は甚だしく、ついに『あぢさゐ』を『台湾』へ合同することを決意する（「巻末小記」）。

#### 1943年（昭和18）46歳

①3月10日、「あぢさゐ台東支部大歌会」開催、台東支部に属する4分会の初の大歌会という（『あぢさゐ』第16巻第2号）。

②4月、台湾日日新報台北本社、編集局調査部に転勤（「巻末小記」）。

③6月、「台湾、紅樹、あらたま、あぢさゐ合同歌会」を開催（『あぢさゐ』第16巻2月号）。

④6月、『あぢさゐ』廃刊。

よしたかは、「あぢさゐ台湾に合同に決す」として、13首を詠んでいる。そのうち、5首をあげる（『台湾』第4巻第6号、1943年〈昭和18年〉）。

みづからのひと世もここに<sup>あらた</sup>革まりあなおほほ  
しき徂く春の雲  
身みずから爆ぜてぞ散らふ壮んさに思ひなぞ  
らふ未だまどひつつ  
はたとせに近きとし月おろかともいふべし熱  
きいのちつくせし  
あはれなる虚栄ならじか身に従きしものに執  
して捨て惜しみる  
新しく一歩ふみいで行くべかり更に大いなる  
光あふがむ

よしたかは、『あぢさゐ』を廃刊して『台湾』に合同することについて、大きく二つのことを考えていたと思われる（「自爆の弁」）。

「大東亜戦の勃発を楔機とする国家要請からして、あぢさゐの如き地方局部的の小雑誌を紙もない時代に瘦我慢を張って出しつづけようなどは愚の至りである。よろしく大乘の見地から地の利

を得てゐる『台湾』の如き一党一派に偏せぬ、台湾の短歌総合誌ともいふべきものに統合することがあぢさゐとして最も正しい行き道だと私ははっきり考へるようになったのである」。

「あぢさゐは飽くまでも東部台湾に於て、特殊な地理的人文的な発達と歴史をもつて来た結社であるといふ存在理由を記しておきたい。（中略）かくて私は本年四月職務の都合で台東から台北へ転出せねばならなくなったので、主宰者の私が東部に居住せぬことになったのを機として、今こそ自爆合同を執行する時期と決意を固めたのである」——

しかし、この拳はよしたかの本意であったろうか。私は否と言わざるをえない。つぎの一文が、それを明白に語っている。

「昭和十八年軍の横暴で芸文雑誌は統合させられ、紙の配給を停止されるので、台北でやっていた斎藤勇の『台湾』に合併統合したこともある。アララギもいく度か誌名を改題、いくたりかの主宰が変わったことを思へばこれは致しかたがなからう」（「回顧三十年」）。

⑤『台湾』掲載の歌から、ここで井東襄による「台東紅葉谷浴泉」（十首中五首録）をあげる。

墜ち合ひて山なす荒き岩むらの<sup>くら</sup>幽みに由由し  
<sup>たぎ</sup>湍つせの音  
赤<sup>がし</sup>檜のしげるあたりに吊橋の架かるけはいも  
夕ぐれにけり  
冬の日<sup>の</sup>心もしぬに夕ぐれて橋のたもとの野  
芙蓉の花  
沢蟹<sup>むくろ</sup>の亡骸すがしく山水のさざれひたひたに  
冬枯れもせぬ  
この道や高雄州へぞつながれるいく重の山を  
越えゆかむかも

そして井東の批評を紹介すると、「叙景歌として出色のものがあるが、言葉の続けがらに雑なところがあり、爾後の課題であろう。例えば、一首め『山なす荒き岩むら』など『山なす・荒き・岩む



ら』と言う三語がいずれも強い語で、その連用はいかにも聞きにくいのである。定家に『すべて詞に、あしきもなくよろしきも有るべからず。ただつづけがらにて、詞の勝劣侍るべし。』というのは、この辺りのことを指すものであろう。五首め、当時高雄と台東の間には、バスの通る道がなかった。遠く南の海岸の崖の中程の道をバスで行くか、高雄から船で台東の沖にゆき、はしけに乗り換えて上陸するかのいずれかであった。バスにしてもいつ断崖から転落するか、船の場合は、はしけに乗り移るとき、荒波に揺れるはしけに無事移れるか、これはだれも保証できない難関であった。終戦前まではそのような交通事情であったのである。渡辺の第五首を見ると内地の人の知らない事情を思い起こし無量の感におぼれざるを得ない。この五首は力量を感じしめる作（『大戦中に於ける台湾の短歌』58-59頁）となる。

つまり、よしたかの歌の評価について他ではほぼ見られず、また台湾の自然的・地理的環境が解説されていて、かつよしたかが台湾の自然をいかに詠み込んでいるか、等々のことにより引用した。また、このたびは『台湾』全巻に当たることができなかった。したがって、掲載日時も特定できていない。

#### 1944年（昭和19）47歳

- ① 1月1日、『あぢさゐ』廃刊を記念して、歌集『八重雲』を「あぢさゐ叢書」第3編として、著者名「渡辺よしたか」にて大木書房（台北市）から刊行。
- ② 12月2日、二女もみち誕生。

#### (4) 日本への引き揚げ

##### A. 日本への引き揚げ

#### 1946年（昭和21）49歳

4月、台湾から日本へ引き揚げ、妻・次子の郷里である群馬県北甘楽郡小野村（現在：群馬県富岡

市）に居を定める（大岡みつ子談）。

台湾からの引き揚げについて、楊子震は「終戦当時、在台の日本人数は諸説あるが、照り合わせると、軍人18万余人を含め、およそ48万人前後であったと考えられる。日本の台湾植民地統治の終焉に従い、在台日本人の引揚は、1945年の12月末より、まず16万6千余の軍人の復員及び送還から始まって、次に軍人・軍属家族、遺族・留守家族、一般人の順に行われた。総勢48万の日本人が1947年までには引揚を終了した。引揚は船舶で行われ、携帯品は基本的に現金1,000円に若干の食糧、手荷物2つ分の身の回りのものを持参することのみ許された。引揚者は台湾の基隆、花蓮、高雄から出航して日本に帰還した」と述べている<sup>(15)</sup>。

その他、「1947年5月上旬までの台湾における日本人の引揚は、概ね3段階に分けて行われ」、「第1段階（1945年12月末から1946年5月初旬まで）」の過程で、「軍人の引揚が開始されたことで、いよいよ民間人の引揚も現実のものとなっていた。一般人の引揚は、1946年2月21日から4月29日までの2ヵ月の間、軍人・軍属の次に実施された。投入された船舶は延べ212隻に上り、1隻に4000人以上乗った船もあったと言われる」（楊前掲論文、26、32頁）等々、引き揚げの具体的な詳細が分析されている。

1歳半になるもみちは母に背負われ、よしたかはリュック2個に歌集と蒐集した陶器を入れてきたのだが、上野駅でリュックを思わず置いた際、陶器はガチャっとなってしまった、という（松尾もみち談）。

#### B. あやめの死

#### 1947年（昭和22）50歳

- ① 10月15日、長女あやめ病死。

よしたかは「私としての最大の悲痛事」と記す（「跋」）。

また、悲嘆にくれたよしたかは、「私は長女あやめを八つで亡くした。四十三ではじめて子供を得た私はこの子を鐘愛した。それは私の旅中のことで死に目にも逢はなかった。私は人の子の父として、最大悲痛事を体験した。私は再起不能の如く悲嘆にくれたが、『お父さまはどうして私がこんなに可愛いのか？』とよく聴いた。彼は私の愛をよく知ってゐたのだといふことだけがいくばくの慰めであるがこの児は私の中に不滅の聖像として生きてゐる。私を善く生かすための原動力である。あぢさゐの仕事もこれによって最善をつくすべく私を鞭うってゐるのである」（「回顧三十年」）と述懐する【図版7】。

②11月13日、三女・しぐれ誕生。

### 3. 著作

ここでは渡辺よしたかの著作を整理することを目的としたい。しかし、遺族もまたよしたかの編集にかかる『豊秋』、『みどり句集』を蔵することなく、台湾で刊行された『あぢさゐ』を持たない。

この間の状況について、井東襄は1940年（昭和15）前後を念頭におきながら、「当時内台間の交通事情はかなり切迫していて不自由であったこと。その為に台湾の雑誌がどの程度内地に行き渡ったか分からない。行き渡っていたとしても、戦災で消失した物も多く、人々も自分の命を守るのに精一ぱいで、雑誌のめんどうまで見切れなかったのであろう。台湾にいた人は書籍等ほとんど残して来たと言う。仮に日本にあった本も、戦後五十有余年、今まで無事に残っていたとしたら、よほど幸運な雑誌だと言わねばならない」（『大戦中に於ける台湾の短歌—斎藤勇を中心として—』34頁）と述べている。

私は、戦前期に発行された『あぢさゐ』は台湾大学図書館所蔵のものを読んだ。また『あらた

ま』は東京大学、立命館大学、そして台湾大学、各々の図書館所蔵のものを利用した。

#### (1) 『豊秋』（1928年〈昭和3〉11月30日発行、紫陽花社）

刊行の意図は、「昭和三年十月今上即位大典の記念事業として当時未だ黄口未熟なる作品を集録し」とある（「序」、『あけぼの』所収）「満一有余年にして人員百二十名に達した」のであった。

私は遺憾ながら未見であったが、銘傳大学准教授頼衍宏から国立中央図書館台湾分館に蔵されていることを教示され、表紙と奥付の影印を贈られた【図版8】。

内容の精査はこれからである。ここに本島人の歌が収録されていたら、また新しい展望が開ける。

#### (2) 『みどり句集』（渡辺よしたか編、1940年〈昭和15〉9月発行）

遺憾ながら未見である。

本稿、第2章、1940年（昭和15）の第②項を参照のこと。

#### (3) 『あけぼの』（あぢさゐ歌会同人著、1936年〈昭和11〉6月15日発行、あぢさゐ歌会）【図版9】

まず歌会の歴史について「回顧するにあぢさゐ歌会創立は昭和元年、当時一名の作歌者なかりし花蓮港に歌会を創立、同志を糾合、翌昭和二年雑誌を創刊、以来本年四月を以て雑誌刊行は満九年十卷、歌会は十年を迎へたのである」と述べる。

ついで選出作業について「満九年間に於て発表歌数三万、人員三百、製作歌数三十万といふ概数に上ったのではあるが、この中より精選集成後日に胎さむとする作品を検するに誠に寥々寂寞の憾み深く」と慨嘆するとするものの、収録人名は304名にのぼった。

またどのような作歌姿勢かといえば、「吾々は

真個の自我伸展建設のみちなるを強調し主智的、対他的観念を排し、観照の醇化と至誠照応の絶對を信じ可成的歌壇への関心を避け、あぢさゐ独自の風を濟さむことを希つて来た」とある。

書名については、「吾々はここに第一期十年の黎明を望んで爾後の徹底精進奮励を期し、まことの黎明期たらしむべく、又その念願をも含めこの歌集を題して『あけぼの』と命名した次第である」とする(以上、「序」、『あけぼの』所収)。

印刷代について、後年「何と上質紙で天金箔箱入り美装本で七十銭であったが、これは私が台湾日々新報の記者であり、その印刷所ですったからかもしれない」と言及している(「回顧五十年」、『あぢさゐ』第51巻1月号、1971年〈昭和51〉)。

#### (4)『八重雲』(渡辺よしたか著、1944年〈昭和19〉)

1月1日発行、大木書房〈台北市〉【図版10】

刊行の意図は、「十三年台東へ転任から十八年六月『あぢさゐ』『台湾』への合同まで五年六ヶ月の期間を画して、『あぢさゐ』廃刊を記念し、また私の生涯の一期を記念する意味から」と述べる【図版11】。

収録した作品は、『あぢさゐ』及『台湾』に前記期間に発表した約二千首の中から、六百十二首、約三分の一であった。この600首にもものぼるよしたかの歌の分析については、他日別稿を用意したい。

よしたかは、ここにおいて自らの作歌の歴史を紐解いている。既述の部分もあるが、再録する。「明治三十九年から大正三年まで基隆にゐて、十五六から作りはじめ、大正四年からの台南時代になっていくらか熱心になり」、「明治三十九年以来私は殆ど台湾に住んでゐるので、一向に中央歌壇とのつながりを持たないで来たのである。特に誰の作風を傾倒したといふこともなく、また誰の歌集に親しんだといふこともない。僅かに十年間ばかり

アララギを購読した位のもので、全くの自主独往、ひたすら自分で作ることにのみ専念してきたのであって、私のやうな歩みをして来た者は極めて稀であらうと思つてゐる」と。

この姿勢は終生変わらなかつた。つまり中央歌壇に通じて、名を世に顕わすなどということは全く考えなかつた。よしたかは、「台湾の南方性をもつ特殊な文学は私のやうな生え抜きに等しいものでなくては詠めないのだ。台湾独自の短歌の生育はどこまでも台湾の風土に深く根ざしたものでなくてはならない。それには徒らに内地歌壇の糟粕をなめてゐては台湾の短歌芸術は創造されないのだ、といふ考へから私は全く内地歌壇の存在といふものは意識の埒外に置いてひたすらに台湾の風土と一如の生命をよみ上げようと努力しつづけて来たのである」と言う。この純粹性が60余年を経て、『台湾四季』(2008年7月刊行)において蘇つたといえる。

また台湾歌壇の歴史にも言及し、よしたかの20代のころの状況から説明し、「この当時は歌のみの専門雑誌でなく、芸術運動全般の行きかたであった。そのころ今の『あらたま』の前身『リラの花』といふのを浜口正雄君や松下久一君などがやつてゐた。昭和年代にはいつてから私は花蓮港で『あぢさゐ』を創刊したが、昭和十八年までの歴史としては『あらたま』について十七巻の古い歴史をつづけたわけである」と述べているが、よしたかの矜持はまさにその通りである。

書名については、「肇国悠久の理想顕現といふ心から、一連の第一首目の歌 八重雲のただよふ遠つ肇国の み心生くる今のうつつに の第一句を採つて以て題した次第である」と述べているように、その時代相を現したものである。

印刷代については、「これは確か一冊一円位についた」と回顧している(「回顧五十年」)。

おわりに

本稿は、渡辺よしたかの台湾時代の生きざまを中心に、資料を提示する形で忠実に再現することを試み、また戦前期の著作を紹介したものである。

戦後、よしたかは『あぢさゐ』の復刊から始め、その歌会活動を旅から旅へ精力的に行い、個人歌集『蒼き湖』(1964年)、『北海道の歌』(1966年、1971年改訂版)、『悠久の天』(1971年)と出し、会員の年刊歌集もその都度発行していった。また『最高の価値と最大の幸福—無限価値創造の歓喜—』(1949年)、『無窮光—創造主義世界観語録—』(1965年)等の著作において、哲学的思索を深めていった。

よしたかは、1950年(昭和25)に「創造主義の文学」という思想体系を標榜した。その概念を、彼自身に語らしめると、「その主旨は、短歌を作るということを通して己自身の主体性をみつめ、その心がいかなる指向をもっているかを見て、歌を作りあげてゆく。即ち文学そのものは自己創造への道でなければならないのだ。その為にはそもそも短歌そのものがいかなるものでなければならぬか、また短歌雑誌の主なる主宰者がどのような指導理念を持っているか」となる(「回顧五十年」)。

本稿は、この「創造主義理論」を理解し、これらの著作を読み込んでいく作業の際に、よしたかの台湾での経験を熟知する必要があることを指摘して擲筆する。

注

- (1) 野口周一『生きる力をはぐくむ—永杉喜輔の教育哲学—』開文社出版、2003年、参照。
- (2) ところが台湾に下村湖人研究が存在したのである。例えば、張季琳(中央研究院文哲研究所)「下村湖人の台湾経験」『2004年度 財団法人交

流協会日台交流センター歴史研究者交流事業報告書』、財団法人交流協会、2005年、参照。

- (3) 野口周一「国際交流についての一考察」『新島学園女子短期大学紀要』第11号、新島学園女子短期大学、1994年、参照。
- (4) 何川一幸(上天草市長)「発刊のことば」『天草の門』〈上天草市史大矢野町編 4〉熊本県上天草市、2004年、1頁。
- (5) 入江寅治『邦人海外発展史』は名著の誉れ高い。その復刻本、『明治百年史叢書』第303、304巻、原書房、1981年、に収録されている矢野暢の「解説」も参考にはなる。その矢野もいまは亡い。
- (6) 同書の「序」には、皇紀2600年を「永久に記念する為」に編纂されたとある。海外に雄飛する同郷の人々を讃えるためのものではあるが、移住の理由は垣間見える。
- (7) 春山明哲『近代日本と台湾—霧社事件・植民地統治政策の研究』藤原書店、2008年、41頁、参照。春山はこの個所を、宮川次郎著『新台湾の人々』、拓殖通信社、1926年、に依拠している。そこには「田が社会の人気下村より去ると見たと解するよりは、下村が憲政会系である云ふ不便を看破したと断ず可きである」とある(7頁)。同書は「台湾における人物評」という趣きであるが、宮川自身は「私の筆端に触れた人々こそ好い迷惑であって、云はば筆者の喰ひ物になった訳である」と述べている。しかし、私が熟知している台北高校校長の三沢糾や下村湖人についての記述が正鶴をえていることから判断すると、同書は単なる際物ではなく、誠に興味深く捨て難い一書である。
- (8) 村上狂二の「不早と蕃女」には、不早の「この石を採取する頃、わしは或る生蕃の娘と同棲しておりましてナ」、「ああ、あのときの子供も、もう幾つになっているのだなア」と言う言葉が紹介されている(『日本談義』昭和31年3月号、14頁)ことからわかる。
- (9) 『あらたま』の評価については、例えば島田謹二『「あらたま」歌集二種—「華麗島文学誌」—』参照。これは『華麗島文学誌—日本詩人の台湾体験—』明治書院、1995年、に再録されている。
- (10) 尾崎秀実は「明治三十四年十月、母(きた)にともなわれて父(秀太郎・通称秀真)の赴任先台湾へ渡り、大正八年九月、第一高等学校(現在の東大教養部)に入学するまで、ほぼ十八年



のあいだ植民地台湾ですごした」のであった。尾崎秀樹『ゾルゲ事件—尾崎秀実の理想と挫折—』〈中公新書8〉中央公論社、1963年、10頁。

- (11) よしたかが指導に没頭していたことについて、率直な感想は新聞社勤務の傍ら、よくそのような時間がとれたものだということである。よしたかの仕事ぶりは、「回顧三十年」に「一方私はまた、新聞記者として、地方開発のため、花蓮港への郷土愛のために報道心に燃えた」と、その具体的行動も記録している。

因みに、毒舌の宮川次郎は前掲『新台湾の人々』において、「然し何分台日の如きは、記者が兎角鳥なき里の蝙蝠に墮したがる虞れがある。御用、無刺戟、好待遇、皆記者を茶毒する材料である」と述べている(216頁)が、その台日においてよしたかは異彩を放つ存在であったといえよう。

よしたかの三女・中島しぐれは「父は朝日新聞の特派員という肩書きも持っていました。仕事は何もしなかったにもかかわらず、手当ては毎月きちんと入っていたと言っていました」と語っている。

- (12) 2008年12月訪台の折り、台北師範学校の同窓会である国師会会長である黄則修から『台北師範芳蘭会閉会記念誌』台北師範芳蘭会本部、2008年、を贈られた。同書に収録されている「台北師範学校沿革表」によっても、「一師」と「二師」の相違等、制度の変遷が理解できる。
- (13) 二女・松尾もみちも「父は私にも哲学的な話ばかりしていた」と追憶している。
- (14) 私はこれを、東方文化書局刊行『新文学雑誌叢刊』第17巻の巻末に採録されているものと見た。しかし、同叢刊では郭の一文の典拠がわからず、頼衍宏の教示により、「『台北文物』1954年12月からの転載」であることを知り得た。
- (15) 「帝国解体の中での人的移動—戦後初期台湾における日本人の引揚及び留用を中心に—」『東アジア地域研究』第13号、東アジア地域研究会、2006年、25-26頁。なお、加藤聖文「台湾引揚と戦後日本人の台湾観」『台湾の近代と日本』所収、中京大学社会科学研究所、2003年、も参考になる。

〔付記1〕本稿を草し発表するにあたり、渡辺よしたか氏のご遺族・松尾もみち氏及び中島しぐれ氏のご理解とご協力を賜ったことを記しておきたい。また台湾に於ける資料収集に際して、頼衍宏氏(銘傳大学准教授)には多大なる学恩を賜り、黄則修氏(国師会会長)、李毓清氏(實踐大学専任講師)、呉欣芳氏(東呉大学大学院生)にも配慮の行き届いたさまざまなご助力をいただいた。ここに深甚なる謝意を表しておきたい。

〔付記2〕渡辺よしたか氏のご遺族を探す糸口は、群馬県富岡市七日市在住の私の叔母・沖尚子氏のお世話になった。叔母が尋ねあてた大島喜久治氏(元・群馬県立下仁田高校長)が中島しぐれ氏の富岡高校3年間の担任であったことにより、話は急展開していったことを記し、あわせて謝意を表したい。

〔付記3〕本稿は、平成20年度ソニー学園湘北短期大学研究助成による研究成果の一部である。



## *Tanka* Poet Yoshitaka Watanabe : His life and his literary works (Part 1)

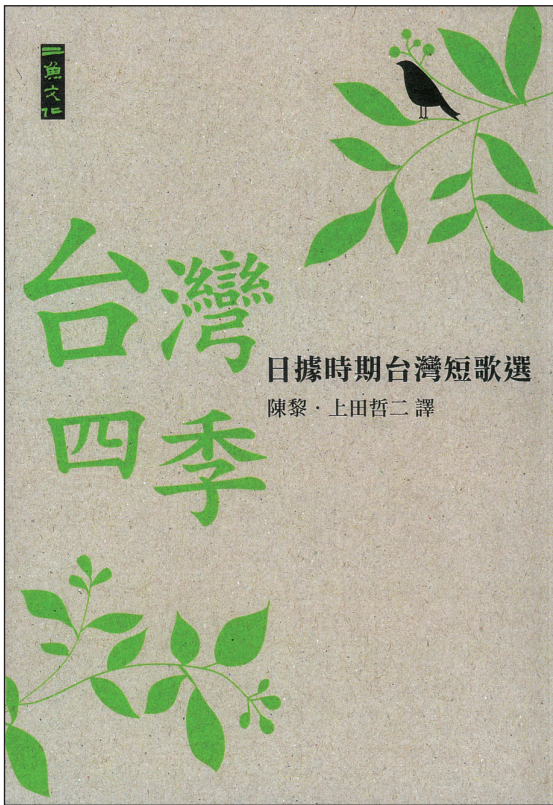
NOGUCHI Shuichi

### **[abstract]**

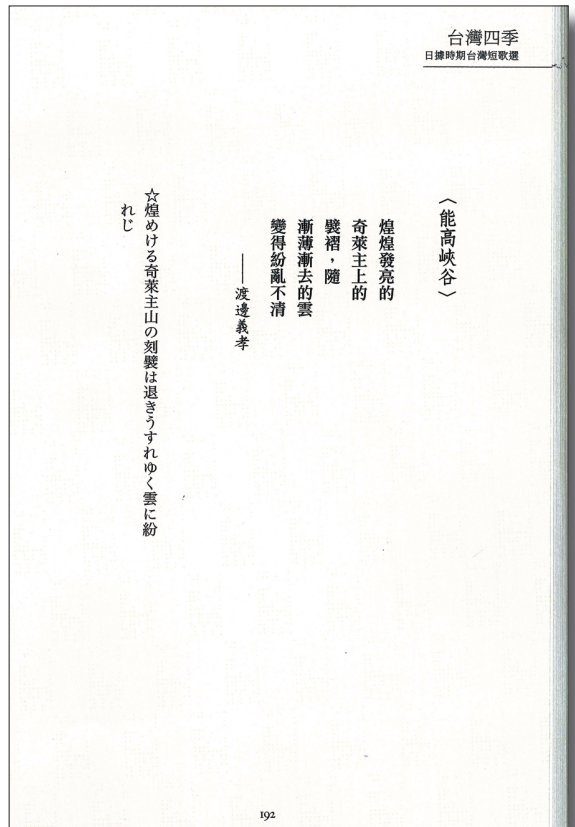
There was a *tanka* poet named Yoshitaka Watanabe. He was born in Amakusa, Kumamoto Prefecture in 1898 (the 31st year of Meiji). After graduating from elementary school, he left for Taiwan to work for a newspaper. With the opening of its branch at Hualian Port, he was transferred there. Soon after that, toward the end of 1926 (the 1st year of Showa) he established a *tanka* club by the name of “Ajisai” (hydrangeas) and in April of the following year he published a periodical called *Ajisai*. Unfortunately, there are no places in Japan now where copies of *Ajisai* are left available. The only place I know that has copies of *Ajisai* is the library of Taiwan University. I set about collecting his writings in Taiwan. This article is a progress report on this work and an attempt as well to reproduce his life (including his activities) in Taiwan through his literary works.

### **[key words]**

Taiwan, Hualian Port, *Ajisai* (hydrangeas)



【図版1】『台灣四季—日據時期台灣短歌選—』(台北市・二魚文化事業有限公司、2008年7月)の表紙。本書に渡辺よしたかの歌12首が採録されている。ここに、よしたかの歌は60余年ぶりに蘇った。



【図版2】奇萊主山の歌は、1933年(昭和8)6月に植有恒(第3次マナスル遠征隊長)とともに行われた同山縦走のときのものである。

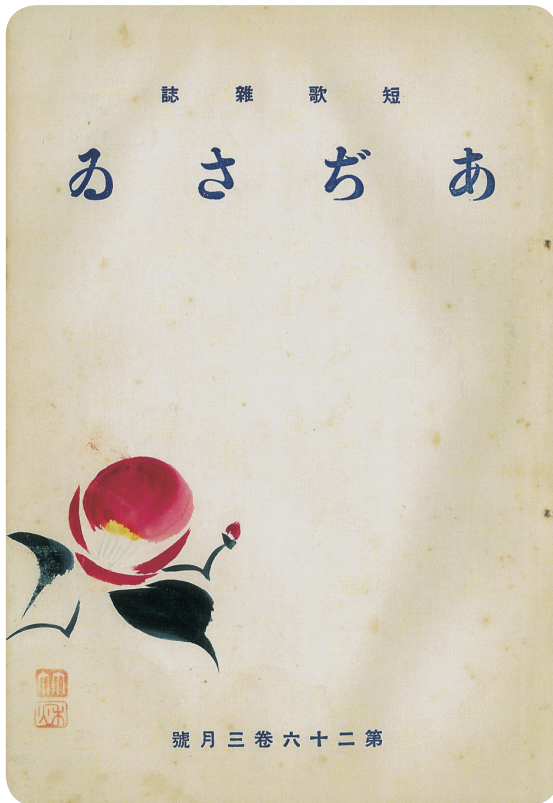


【図版3】 よしたか夫妻と真永（中央）。よしたかの娘たちは、「真永兄さんが父の雰囲気をもよく伝えている」と語る。次子の腕には、長女あやめが抱かれている。1940年（昭和15）のことと思われる。



【図版4】 よしたかは「毎月の表紙は十年一日如く全部肉筆で描く」と述べている（『あぢさゐ』第10巻6月号、1936年〈昭和11〉）。「臺北帝國大學文政學部南方文化研究室」という蔵書印は、『あぢさゐ』を同研究室が収集し、保管していたことを示す。





【図版5】 戦後のものであるが、『あぢさゐ』第26巻3月号及び7月号（1951年〈昭和26〉）の表紙には「竹秋」という落款が見える。





【図版6】 門人・藤井重雄(右)を送る。骨董を趣味としたよしたかの生活の一端が窺い知れる。



【図版7】 1942年(昭和17)11月15日、あやめ、七五三のお祝い。右よりよしたかと絃一、次子とあやめ、左端に大岡みつ子。

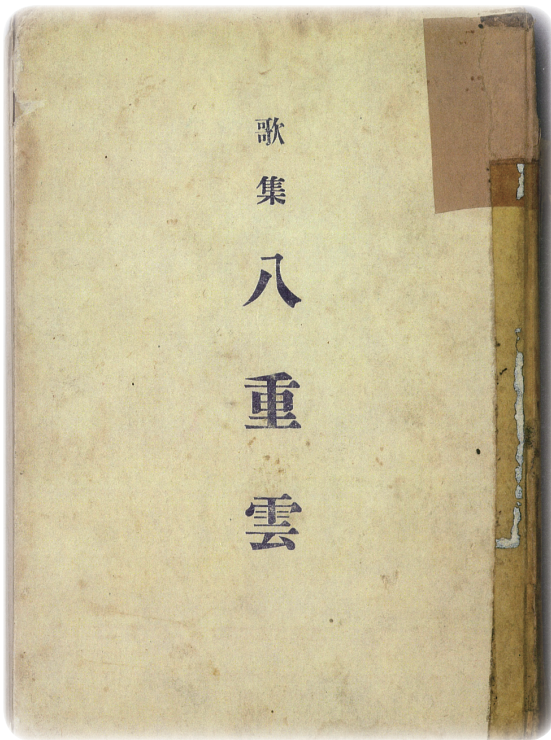


【図版8】 あぢさゐ歌会、最初の歌集。この影印は銘傳大学准教授頼衍宏氏から贈られた。

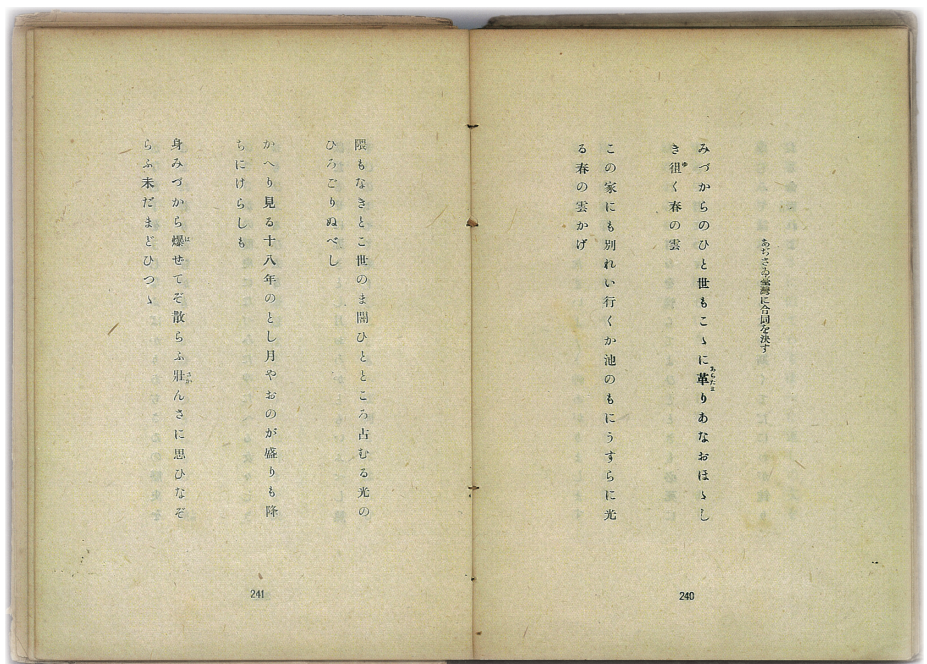


【図版9】 あぢさゐ歌会の第二歌集『あけぼの』（1936年〈昭和11〉6月15日刊）。表紙の絵はよしたかの筆によるものである。尾崎秀真は「芸術の神様ならでは出来ぬ芸当」と激賞した。





【図版10】よしたかの処女歌集『八重雲』  
(1944年〈昭和19〉1月1日刊)。



【図版11】『八重雲』所収「あぢさゐ臺灣に合同を決す」の項。『あぢさゐ』の廃刊はよしたかの本意ではなかった。後年、よしたかは「昭和十八年軍の横暴で文芸雑誌は統合させられ、紙の配給を停止されるので、台北でやってゐた斎藤勇の『台湾』に合併統合したこともある」と述べる（『回顧三十年』、『あぢさゐ』第30巻9月号、1964年〈昭和39〉）。

